

小論文部門 優秀賞

歌舞伎演目『若^{わか}緑^{みどり}勢^{いき}會^あ我^が』〈外郎売〉の口上にみられる 妙薬「外郎一透頂香」はどんな薬か

原田 香里

俳優やアナウンサーが、はっきりと滑らかにセリフを発音するための滑舌練習として用いる稽古本の中に、〈外郎売〉という口上がある。私は図書館でこの〈外郎売〉に出会い、最初のうちはそれが歌舞伎の演目の中の口上からの出典であるとは知らず、作品の半分以上を占める早口言葉に興味をもって何度も何度も読み返していた。

〈外郎売〉は、商人欄干橋虎屋藤右衛門(剃髪して円齋と名乗る)が、中国伝来の妙薬「外郎一透頂香」の由来や効能を早口で淀みなく述べて客を引こうとするという内容のものである。欄干橋虎屋藤右衛門は先ず自己紹介をして丁寧に自分の身元を証明し、これから売ろうとしている妙薬「外郎一透頂香」の由緒を説き、その効き目を述べる。また、その効能を証明するために客の前で自らその薬を一粒飲んで見せ、長い長い早口言葉も淀むことなく口を滑り出すほど元気が漲ることを、自ら証明するのである。この口上〈外郎売〉の中で、欄干橋虎屋藤右衛門は妙薬「外郎一透頂香」を以下のように紹介する。

元朝より大晦日まで、お手に入れますこの薬は、

昔、陳の国の唐人、外郎という人わが朝へ来たり、帝に参内の折から、此の薬を深く籠め置き、用ゆる時は一粒ずつ、冠のすき間より取り出だす。依ってその名を帝よ

り「頂透香」と賜る。即ち文字には、「頂き、透く、香」と書いて、「とうちんこう」と申す。……お上りならば右の方、お下りなれば左側、八方が八つ棟、おもてが三つ棟玉堂造り、破風には菊に桐のとうの御紋を御赦免あつて、系図正しき薬でござる。……さらば一粒食べかけて、其の気味合いをお目にかけてみましょう。先づ此の薬を、かように一粒舌の上ののせまして、腹内へ納めますると、イヤどうも言えぬは、胃、心、肺、肝がすこやかに成つ

て、薫風喉より来たり、口中微涼を生ずるが如し、魚鳥、きのこ、麺類の喰い合わせ、其の外、万病即効あること神の如し。さて、この薬、第一の奇妙には、舌のまわることが銭ごまがはだして逃げる。ひょっと舌が廻り

出すと、矢も楯もたまらぬじゃ。そりゃそりゃそらそりゃ、まわってきたは、廻ってくるは……早天そうそう、相州小田原透頂香。隠れござらぬ、貴賤群衆の花のお江戸の花ういろ。……産子、這う子に至るまで、このういろの御評判……今日おいでの何れも様に、上げねばならぬ、売らねばならぬと、息せい引っぱり、東方世界の薬の元締、薬師如来も上覧あれと、ホホ、敬つて、ういろはいらっしゃりませぬか。(『ことばの国〈外郎売〉』より)

欄干橋虎屋藤右衛門によれば、妙薬「外郎一透頂香」は飲めばたちまち五臓六腑が健康になり、口には清涼感が漂い、どんな病気にもすぐに利くのだという。そんな夢のような薬が存在するのだろうか。私は最初、〈外郎売〉は口の上手い商人が、万能薬と称した偽薬「外郎一透頂香」をあの手この手で売りつける江戸時代の悪徳商法の話なのだろうと思っていた。しかし、もし本当に実在したなら凄い薬だ。

外郎と聞いて最初に思い浮かんだのは、米の粉に水や砂糖を加えて蒸して作る四角くて甘い、あの菓子の外郎だ。だが〈外郎売〉の文中に「一粒食べかけ」とあるからには丸薬と考えるのが普通である。お菓子の外郎と薬の外郎は違うのだろうか。この問いに答えを与えてくれたのが、『東海道中膝栗毛』でお馴染みの江戸神田八丁堀の住人、弥次郎兵衛と喜多八

(通称、弥次喜多)の2人である。

此しゆくのめいぶつういろみせちかくなりて
北「ヲヤこゝの内は、屋根にでへぶでくまひくまのある内だ」

弥「これが名物のういろうだ」

北「ひとつ買ってみよふ。味(うめ)へかの」

弥「うめへだんか。顔がおちら」

北「ヲヤ餅かとおもつたら、くすりみせだな」

弥「ハハハハ、こうもあるふか」

ういろを餅かとうまくだまされてこは薬じゃと苦いかほする(『東海道中膝栗毛』より)

十返舎一九の滑稽本『東海道中膝栗毛』初編一江戸から箱根まで一で描かれる弥次喜多の旅のひとコマである。弥次喜

多は、でくまひくま（凸凹）の屋根をもつ店（八方が八つ棟、おもてがぎょくどうづくり三つ棟玉堂造りの店）の前に立ち、「うひらう」という看板を見てお菓子の外郎を想像しその甘さを思い浮かべる。やがて小田原の伝統丸薬である外郎であることを知ると「ういろうという看板を見て甘い外郎菓子かと思ったが、苦い薬の外郎かと顔をしかめる」と一句詠み上げている。『東海道中膝栗毛』には、妙薬「外郎一透頂香」とお菓子の外郎が両方登場するのである。

さらにこのページには妙薬「外郎一透頂香」の店であると考えられる『江戸時代八棟造絵図』と題された挿絵が掲載されており、この絵に描かれる店には大きく「うひらう」「透頂香」と書かれた看板が掲げられている。1800年代に完成したこの作品の中で弥次喜多も私同様お菓子の外郎と勘違いしてしまうという場面があることから、妙薬「外郎一透頂香」は実在した歴史ある薬であると考えられる。それはいったいどのような薬だったのだろうか。その効能や成分、歴史や販売の仕方、味はいったいどのようなものだったのだろうか。本を使って調べてみることにした。

まず、この薬の成分や効能はどのようなものだったのだろうか。『ういろう物語—一子相伝で受け継がれた、霊薬の秘密と伝統の軌跡』を読んでみると、驚くことに妙薬「外郎一透頂香」は今もなお存在し、製法は一子相伝ながら、昔の成分製法共に変わることなく店舗たった一つの対面販売でのみ販売されているということが分かった。この本で、プロローグとして主人公である加奈子が妙薬「外郎一透頂香」を求めて小田原の店を訪れ、外郎の箱を手にする。

外装の箱には、ケイヒ・チョウコウ・ニンジン・シュクシャ・ハッカ・カンゾウ・ジャコウ等十一種類の漢方の成分と、効能として、腹痛・食中毒・吐き気・頭痛・めまい・声嘎れ・喉の痛み・乗り物酔い・歯痛・強壮薬などいくつも書かれている。

店の人は能書きを指示して、

「こんなにオールラウンドでいいのかなと思うでしょ？漢方はですね、病んでいるところ、弱っているところに自然と届き、働きかけるのです。治ろうとする生命力が薬効をキャッチするといいましょうか」（『ういろう物語—一子相伝で受け継がれた、霊薬の秘密と伝統の軌跡』より）

これによれば、妙薬「外郎一透頂香」は〈外郎売〉の口上にあるように、実に多くの効き目をもたらす薬であるようだ。そしてその成分は生薬を柱として成り立っていることが分かる。

では漢方十一種類それぞれにはどのような効能があるのだろうか。図書館の蔵書『生薬の世界—自然の中に薬を求めて』

『生薬 101 の科学—薬理効果・採集法から家庭で使うコツまで』を用いて分かる範囲で調べてみた。

ケイヒ桂皮はクスノキ科シンナモム属植物の幹や枝の皮で、効能は健胃・駆風（腸内のガスの排出を促す）・解熱・鎮痛・去痰。チョウコウ丁香はチョウジの蕾で、効能は芳香性健胃や興奮（からだの各器官の働きを高める作用をする薬）。ニンジン人参はオタネニンジンの根で、効能は健胃・強壮（身体の栄養不足や衰弱をなおし、丈夫にすること）・興奮で、神経衰弱や虚弱者に用いる。シュクシャ縮砂はベトナム、タイ、ミャンマーに産するショウガ科植物の種子で、効能は芳香性健胃。ハッカ薄荷はハッカの葉で、効能は解熱・清涼・健胃。カンゾウ甘草はカンゾウの根で、効能は緩和・鎮痙・去痰・矯味、風邪の身体疼痛に用いる。ジャコウ麝香はジャコウジカの雄の腺分泌物で、効能は興奮・強心（さまざまな原因で衰弱した心臓の働きを高める作用）や鎮痙、とある。

実際には組み合わせや量により発揮される効能も違ってくようだ。それこそ製法が一子相伝である所以だろう。成分を知ること、夢の妙薬であった「外郎一透頂香」がぐっと身近に感じられるようになった。

また、調べていくうちに妙薬「外郎一透頂香」は一人の歌舞伎役者の病を完治させ、千両役者にまで花開かせたといういわれがあることを知った。その歌舞伎役者とは、「不動明王の申し子」としてデビューを飾った二代目市川團十郎である。初代から名を継いだ二代目市川團十郎は、当初2つの壁に行く手を阻まれていた。

故団十郎の荒事を観たものは、一瞬にして重圧の苦悩を解き放たれる快感を味わうことが出来たのである。けれども初代の創造した荒事芸だけでは、そのまま何代も人気をつなぐことはできない。ことにきびしい舞台であるから、代々の団十郎たちは、家芸の伝統と、民衆眼光にこたえるための想像活動と、この2つの重荷を背負ったけわしい芸の道を克服しなければならなかった。（『市川團十郎』より）

このような歌舞伎という厳しい世界の中、二代目市川團十郎は新しいものを創造していかなければならないというプレッシャーを背負い、さらには役者として致命的なことに喉を患ってしまう。しかし、この2つの壁を二代目市川團十郎は、妙薬「外郎一透頂香」を用いて乗り越える。『ういろう物語—一子相伝で受け継がれた、霊薬の秘密と伝統の軌跡』の推薦の辞として、十二代目市川團十郎は以下のように述べている。

二代目市川團十郎が体調を崩し、喉を痛めたとき俳句仲間であった外郎家の隠居意仙さんの薦めで、〈ういろう〉を服用したところ、薬効によって見事に復活しました。二代目は感謝し〈ういろう〉の薬効を早口言葉のセ

リフに載せ、舞台に掛けたところ大評判を得、今でもこの早口言葉はアナウンサーの勉強に使われています。

(『ういろ物語——子相伝で受け継がれた、霊薬の秘密と伝統の軌跡』より)

しかし二代目市川団十郎が妙薬「外郎一透頂香」の効能に感動し、歌舞伎十八番の一つ〈外郎売〉として大成するまでの道のりは簡単なものではなかった。

この時、時代は江戸。歌舞伎は幕府による統制を受けていた。さらに同じころ市川団十郎の兄貴分ともいえる生島新五郎が、大奥女中絵島との不義の罪を問われ、三宅島に流罪となり、関係者 1500 人が処刑されるという江島生島事件も起きている。それとは対照的に、当時妙薬「外郎一透頂香」は幕府や小田原藩への献上品であり、外郎の当主は藩から町の宿老に任じられていたほどであったという。

そのような難しい立場にあった二代目市川団十郎であるが、この妙薬「外郎一透頂香」が世間に馴染みなく、ひっそりと販売を続けていることを知り、このすばらしい薬をもっと皆に知ってもらおうと〈外郎売〉の口上を完成させる。

二代目市川団十郎は直接丸薬外郎の店主に許しを得て演目『若草勢曾我』の中でその口上を演じ、一斉を風靡した。図書館の蔵書『市川団十郎』の二代目団十郎曾我狂言上演年表を開くと、1716 年享保 3 年正月、演目『若草勢曾我』曾我十郎役、劇場森田座にて〈外郎売〉セリフ大当りとある。私は歌舞伎に詳しくないが、二代目市川団十郎が妙薬「外郎一透頂香」によって病を吹き飛ばし、歌舞伎界でのあらたな創造に成功したことは間違いない。

では妙薬「外郎一透頂香」の歴史や販売の仕方、その味はどのようなものなのだろう。『ういろ物語——子相伝で受け継がれた、霊薬の秘密と伝統の軌跡』の中で主人公加奈子は当主の外郎さんと以下のように言葉を交わす。

「外郎さんの祖先が小田原に来たのはいつですか」

加奈子の胸中に、聞きたいことが渦巻いている。

「16 世紀初め、北条早雲の招きで京から下ってきたと伝えられています。京の外郎家は朝廷から公家の位を頂き、小田原では武士として北条家に仕えていたのです」外郎さんはこともなげに答えるが、薬の〈ういろ〉も外郎氏も、京で応仁の乱を乗り越え、北条氏の膝元・小田原で戦国時代を生き抜いたことになる。

——途方もない歴史をもっているんだなあ。

外郎さんの案内で店舗の奥の「蔵の博物館」を見せてもらった。秤や調合用の鉢、薬を載せる三方、背負子などが展示されている。おもしろかったのは、〈ういろ〉の粒を数える匙だ。匙ごとに二十粒、十六粒、十二粒、六粒、四粒の丸薬サイズの穴が穿たれていて、ひとすくいが必要な数を計ることができる。裏返すと、それぞれに

百文、三十二文、二十四文、十二文、八文と、薬の値段が書かれていた。江戸時代の、「価格も分かる計量スプーン」といっていい。東海道を旅する人たちは、ここで道中薬を買い求め、大切に懐に忍ばせて発っていったことであろう。

……「五、六粒だったっけね。救いの神だ……」

手渡された銀色の小さな粒を、そっと含んだ。爽やかな香がする。それだけで疲れが癒される。銀色のコーティングが溶けたのか、ちょっと苦みがあるが、香気が爽快だった。(『ういろ物語——子相伝で受け継がれた、霊薬の秘密と伝統の軌跡』より)

妙薬「外郎一透頂香」は長い歴史を霊薬として生き抜き、今なお昔と変わらない製法・成分・販売方法で受け継がれているのである。この本には『写真で見えるういろ家の歴史』がカラーで掲載されている。私はこの写真で初めて、印籠や薬包紙、「価格も分かる計量スプーン」と共に写る銀色に光る夢の妙薬「外郎一透頂香」を見ることができた。

図書館の一冊の本がきっかけに興味をもった謎の妙薬「外郎一透頂香」。様々な本からこの薬が実在するものだと知り、その実態が明らかになるのをワクワクしながら色々な本を手にとってその効能や成分、歴史や販売形態、味について知っていくという楽しい冒険をすることができた。次は実際に小田原まで行って、二代目団十郎や弥多喜多の会った妙薬「外郎一透頂香」を手にとってみたいと思う。

図書館にはまだまだ興味を引き、行動を起こさせる種がたくさん埋まっているに違いないと実感した。

参考文献

『ことばの国 新・ちくま文学の森 14 〈外郎売〉』鶴見俊輔ほか編、筑摩書房、1995

『東海道中膝栗毛 (日本古典文学大系:62)』十返舎一九著、麻生・磯次校注、岩波書店、1958

『東海道中膝栗毛 (日本古典文学全集:49)』十返舎一九著、中村幸彦校注、小学館、1975

『生薬の世界—自然の中に薬を求めて』三橋博著、講談社、1978

『生薬 101 の科学—薬理効果・採集法から家庭で使うコツまで』清水岑夫著、講談社、1999

『市川団十郎』西山松之助著、吉川弘文館、1966

『歌舞伎十八番』郡司正勝校注、岩波書店、1965

『ういろ物語——子相伝で受け継がれた、霊薬の秘密と伝統の軌跡』山名美和子、新人物往来社、2010

(はらだ かおり・札幌校 4 年)